

# ルーブリック評価を活用した歌唱指導についての一考察

1) 久原 広幸 2) 西村 敬子

## A Study of Singing Guidance Utilizing the Rubric Evaluation

Kubara Hiroyuki Nishimura Keiko

(2020年11月25日受理)

### 1 はじめに

知識基盤社会の現代社会では、新しい知識・情報・技術が社会のあらゆる領域での活動の基盤となっている。知識・情報・技術をめぐる変化は急速に発展し、我々が社会の変化を的確に予測することはますます難しくなっている状況にある。

このような社会の中、第1期の教育振興基本計画(平成20年7月1日閣議決定)、第2期の教育振興基本計画(平成25年6月14日閣議決定)が閣議決定され、生涯を貫く教育の方向性が示され、教育政策が推進されてきた。第1期では、平成20(2008)年からの10年間を通じて目指すべき教育の姿として、①義務教育修了までに、すべての子どもに、自立して社会で生きていく基礎を育てる、②社会を支え、発展させるとともに、国際社会をリードする人材を育てるという2点が掲げられ、計画が推進された。第2期の教育振興基本計画では、第1期の検証結果を踏まえ、「自立」「協働」「創造」を基軸とした新たな社会モデルを実現するため、生涯を貫く教育の方向性が設定され計画が推進された。こうした取り組みの成果として、初等中等教育段階においては、2015年のPISAやTIMSSにおいて我が国が引き続き世界トップレベルを維持するとともに、全国学力・学習状況調査において成績の低い県の成績も全国平均に近づき、学力の底上げが図られたことが報告された。大学等の高等教育段階においては、学生の主体的な学修活動を後押しする学修環境整備や、「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー)、「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー)及び「入学者受入れの方針」(アドミ

ッション・ポリシー)の三つの方針の策定・公表、全学的な教学システムの構築など、大学教育の質的転換に向けた取り組みが推進されている。

2030年以降の社会の変化、国際的な教育政策の動向等を踏まえ、新たに第3期の教育振興基本計画が平成30年6月15日に閣議決定された。第3期の教育振興基本計画では、これからの大学等の高等教育段階においては、授業改善はもちろんのこと、卒業後のゴールを見通して大学として体系的で組織的な教育活動の展開、問題の発見・解決に向けた学生の能動的・主体的な学修を促す取り組みの充実、学生と教員の対話に基づいた教育の推進、学修成果の可視化やPDCAサイクルによるカリキュラム・マネジメントの確立等に取り組みを重要視している。

小学校や就学前教育においては、引き続き児童幼児の確かな学力、豊かな心、健やかな体などの「生きる力」の育成が踏襲された。中でも、豊かな心の育成には、多世代交流や異年齢交流の活動を重視した学習指導要領の着実な実施とともに、様々な体験を通じて学びに向かう姿勢や態度を育成するよう、幼児期からの教育の質の向上に取り組むことが求められている。豊かな情操を培うには、感動体験を通して、音や音楽を表現したり感じたりする喜びを味わわせることが大切である。

そのために教員には、楽譜を見て歌ったりCDに合わせて歌ったりしながら、子どもに音楽を通して感動や楽しみを味わわせる指導技術が求められる。子どもが音楽活動を楽しむことができるような保育や授業を行うためには、教員の歌唱に関する技能が少なくとも影響しており、大学の養成期間の中で歌唱に必要な基礎的な技能・力量を身に付けること

執筆者紹介：1)中村学園大学短期大学部幼児保育学科 2)中村学園大学教育学部児童幼児教育学科  
別冊請求先：久原広幸，〒814-0198 福岡県福岡市城南区別府 5-7-1 kubara@nakamura-u.ac.jp

は必要なことである。

そこで、学生の学修到達度調査やルーブリック評価を活用し、学生と教員の対話に基づいた授業や、学修成果が可視化できる授業を基に、教員の授業改善を進めながら、能動的・主体的に音楽歌唱の学修へ取り組む学生を育成するため、本研究に取り組んだ。なお、本研究は、2018年に導入したルーブリック評価やアンケート調査を基に行ったものである。

## 2 ルーブリック評価の活用と研究の目的

ルーブリック評価は、学生一人ひとりの授業の総括的評価や形成的評価にも積極的に活用できる。授業の到達目標の達成度及び評価基準を教員と学生が共有することで、学生の能力を客観的に評価することができ、そのことが大学教育の質を担保することにつながる。

ダネル・スティーブンス、アントニア・レビは、著書『大学教員のためのルーブリック評価入門』の中でルーブリックを使う理由として次の6点を挙げている。

①タイミングの良いフィードバック（表にチェックを入れることで、学生に対して迅速なフィードバックができること）、②学生による詳細なフィードバックの活用（学生の強みと弱みが把握でき、進展状況が詳細にわかること）、③批評的思考力<sup>1)</sup>のトレーニング（アカデミックなよい助言と組み合わせれば、学生の批評的思考力を学術的に伸ばす役割を果たすこと）、④他者とのコミュニケーションの活性化（学生と教員または学生同士における教育目標や意図等を共有すること）、⑤教員の教育技法の向上（複数の授業にわたって共通に存在する学生の盲点やかけている部分を指導しやすくすること）、⑥平等な学習環境作り（教員が使う言葉の概念を共有できること）

これらのメリットを、本学の「音楽Ⅰ歌唱」の授業に置き換えると、メリットには次のような内容が考えられる。①学生自身の歌唱表現の課題点が把握でき、教員の評価もわかる。②複数のルーブリックを通して、自分の弱み（例えば「音程の取り方が苦手である」「リズムの取り方が曖昧である」等）が具体的にわかる。③課題解決に向け、自分で計画を立て課外

で予習・復習できる。④課題解決に向け、不明な点を教員に質問したり、友達と協働して練習したりできる。⑤学生と教員の評価の乖離を検討することで、学生への指導法を見直すことができる。⑥ルーブリック評価を説明する際に、目標に使われている文言や目標とする姿、評価尺度を判断する評価基準を共通理解できる。

以上、本研究では、①から⑥を踏まえ、本学の「音楽Ⅰ歌唱」の授業の中で、学生による自己評価と教員による評価について、評価ルーブリック表を用いて実施し、学生の評価と教員の評価の比較、学生の変容と感想などを把握しながら、次のことを探っていききたい。

- (1) ルーブリック評価を活用し、「音楽Ⅰ歌唱」の到達目標や評価基準を共通理解したり、教員や学生同士でのカンファレンスを行ったりすることで、自分の課題解決に見通しをもたせ、学修に対する意欲を向上させること。
- (2) 学生のルーブリック評価を通して、教員の授業改善の方途を明らかにすること。

## 3 「音楽Ⅰ歌唱」におけるルーブリック表

表1は、「音楽Ⅰ歌唱」のシラバスの一部を抜粋したもので、テーマ及び到達目標・授業概要・評価方法を明示している。

表 1

平成30年度 後学期 音楽Ⅰ歌唱 シラバス
<b>テーマ（ねらい）及び到達目標</b>
<p>【テーマ】 本科目は、小学校教諭、幼稚園教諭、保育士として必要な歌唱に関する専門知識及び技能を修得することをねらいとしている。</p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・簡単な楽曲の視唱ができる</li> <li>・基本的な発声法について理解している</li> <li>・指揮法を理解し、指揮ができる</li> <li>・幼児児童等への歌唱指導に必要な知識を身に付けている</li> <li>・コールユーブンゲンの七度音程までを表現できる</li> </ul>
<b>授業概要</b>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・視唱力を高めるソルフェージュ</li> <li>・基礎的な音楽理論</li> <li>・幼児児童等の教材楽曲を中心とした歌唱指導</li> </ul> <p>※前半は理論的な講義や一斉指導、後半は3グループに分かれてコールユーブンゲンの個別指導</p>
<b>評価方法</b>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・歌唱表現への理解や技能の定着をテスト・レポート等でとらえる 10%</li> <li>・コールユーブンゲンの練習の取り組み状況 10%</li> <li>・ミニテストへの取り組み 10%</li> <li>・実技試験 70%</li> </ul> <p>(歌詞唱 20%、移動ド唱 20%、コールユーブンゲン 30%)</p>

<sup>1)</sup>批評的思考 新しいトピックに対して、自立的に、正確なデータを蓄積し、偏見を持たずに思考し、推論し、判断する力。(Huba & Freed,2000)

本科目は、本学教育学部 1 年後学期に設置された科目で、小学校教諭・幼稚園教諭・保育士として必要な歌唱に関する専門的知識及び技能の修得をねらいとする。到達目標は、簡単な楽曲の視唱、発声法についての理解、指揮法の理解と実践、幼児や児童への歌唱指導に必要な知識、コールユープンゲンの歌唱表現、これらの修得を目標とする。このシラバスに基づき、本科目を修得するための指標となるループリックを 2 種類（表 2, 3）作成した。

評価ループリック表の作成は、ステューブンス (2014) らが提唱した『大学教員のためのループリック評価入門』や、2018 年に本学が行った研修プログラム「教育ワークショップ」の中で坂本らが発表した「ループリック評価の実践に向けたレクチャー&ワーク」を参考に作成した。

作成の手順としては、ループリック作成の要となる課題、評価尺度、評価観点、評価基準の 4 要素を定め、「音楽 I 歌唱」の評価に適した文言を考案した。2 つのループリック表について、評価尺度は共通した文言を用い、「模範的」「標準」「努力を期待」の 3 段階とし、「模範的」の中でも「S」「A」、「標準」の中でも「B」「C」と細分化し、5 段階の評価尺度とした。

表 2 「音楽 I 歌唱」 評価ループリック 学籍番号 氏名

目標：小学校教諭、幼稚園教諭、保育士として必要な歌唱に関する専門知識及び技能の修得を目指す。

	模範的		標準		努力を期待	自己評価
	S	A	B	C	D	
知識	基本的な発声法についてよく理解している。		基本的な発声法についてある程度理解している。		基本的な発声法について理解していない。	
	幼児児童等への歌唱指導に必要な知識をよく理解している。		幼児児童等への歌唱指導に必要な知識をある程度理解している。		幼児児童等への歌唱指導に必要な知識を理解していない。	
技能	基本的な指揮法についてよく理解している。		基本的な指揮法についてある程度理解している。		基本的な指揮法について理解していない。	
	簡単な楽曲の視唱が正確にできる。		簡単な楽曲の視唱がある程度できる。		簡単な楽曲の視唱ができていない。	
意欲	コールユープンゲンの7度音程までも正確に表現できる。		コールユープンゲンの7度音程までもある程度表現できる。		コールユープンゲンの7度音程までも表現できない。	
	基本的な指揮が正確にできる。		基本的な指揮がある程度できる。		基本的な指揮ができない。	
意欲	歌唱、合唱、レポート課題を通し、授業に意欲的に参加している。		歌唱、合唱、レポート課題を通し、授業に一定程度意欲的に参加している。		歌唱、合唱、レポート課題を通し、授業に意欲的に参加していない。	
	コールユープンゲン課題を意欲的に取り組んでいる。		コールユープンゲン課題をある程度意欲的に取り組んでいる。		コールユープンゲン課題を意欲的に取り組んでいない。	

表 3 「音楽 I 歌唱」 評価ループリック (技能面) 学籍番号 氏名

目標：コールユープンゲンの課題を用い、小学校教諭、幼稚園教諭、保育士として必要な技能の修得を目指す。

	模範的		標準		努力を期待	自己評価
	S	A	B	C	D	
コールユープンゲン	課題の音程を正確に歌える。		課題の音程をある程度歌える。		課題の音程を歌えない。	
	課題のリズムを正確に歌える。		課題のリズムをある程度歌える。		課題のリズムを歌えない。	
	課題の拍子を理解し、正確に歌える。		課題の拍子を理解し、ある程度歌える。		拍子を理解しているが歌えない。拍子を理解していないので歌えない。	
	息継ぎの位置を理解し正確に歌える。		息継ぎの位置を理解しある程度歌える。		息継ぎの位置を理解しているが歌えない。息継ぎの位置を理解していないので歌えない。	
意欲	課題の歌唱を豊かに表現する音量で歌える。		課題の歌唱を表現できる程度の音量で歌える。		課題の歌唱を表現する音量で歌えない。	
	コールユープンゲン課題を意欲的に取り組んでいる。		コールユープンゲン課題をある程度意欲的に取り組んでいる。		コールユープンゲン課題を意欲的に取り組んでいない。	

表 2 のループリックは、授業全体の到達目標を明示し、評価段階ごとの基準を示したものである。表 3 のループリックは、表 2 のループリックを構成する評価の観点別の到達目標や、評価項目と評価基準を示したものである。ここでは、「技能」に関するコールユープンゲンの歌唱表現について焦点を絞った。

表 4

授業計画 (全 15 回)		
1	全体…幼児および児童の発声、変声期の指導	表 2 ループリック(授業全体) 配布
2	前半…楽典テスト 後半…コールユープンゲン 33acef	
3	前半…児童向け楽曲の分析と表現「こいのぼり」 後半…ミニテスト① コールユープンゲン 33ac	
4	前半…児童向け楽曲の分析と表現「海」おぼろ月夜 3拍子と指揮 後半…ミニテスト② コールユープンゲン 33ef	
5	前半…児童向け楽曲の分析と表現「春がきた」「紅葉」4拍子と指揮 後半…ミニテスト③ コールユープンゲン 35b36c	表 3 ループリック (技能面)実施
6	前半…児童向け楽曲の分析と表現「冬げしき」「ふるさと」階名唱 後半…ミニテスト④ 「海」「春がきた」「紅葉」「おぼろ月夜」	
7	前半…日本の民謡 後半…ミニテスト⑤ 「冬げしき」「ふるさと」階名唱	
8	前半…多様な形態の声楽曲の鑑賞 歌劇、オペレッタ、カンタータ 他 後半…ミニテスト⑥ コールユープンゲン 39cd	
9	前半…手遊び歌、あそび歌 *レポート提出 後半…ミニテスト⑦ コールユープンゲン 40abc	
10	前半…パートナースングを歌おう 後半…ミニテスト⑧ コールユープンゲン 41a42a	
11	前半…合唱曲を歌おう 実技テスト課題曲発表 後半…ミニテスト⑨ コールユープンゲン 43bd	
12	前半…合唱曲を歌おう 後半…ミニテスト⑩ コールユープンゲン 43ef	表 3 ループリック(技能面)実施 ・アンケート実施
13	前半…合唱指導の実際と指揮 後半…試験課題の復習	
14	実技テスト (歌詞唱、移動ド唱)	
15	実技テスト (コールユープンゲン)	

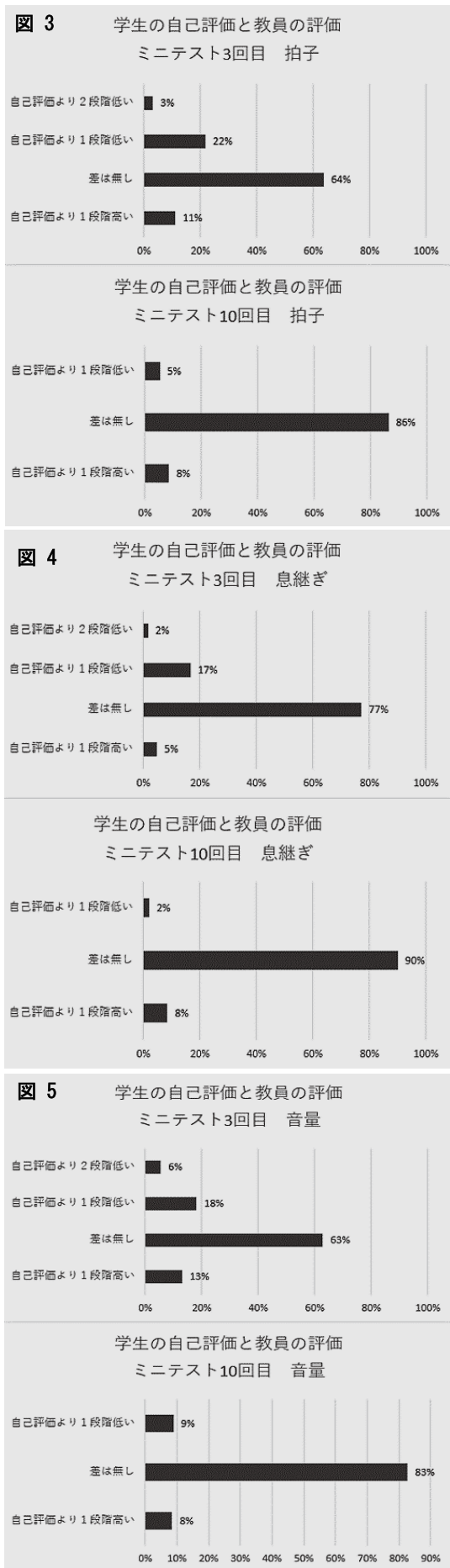
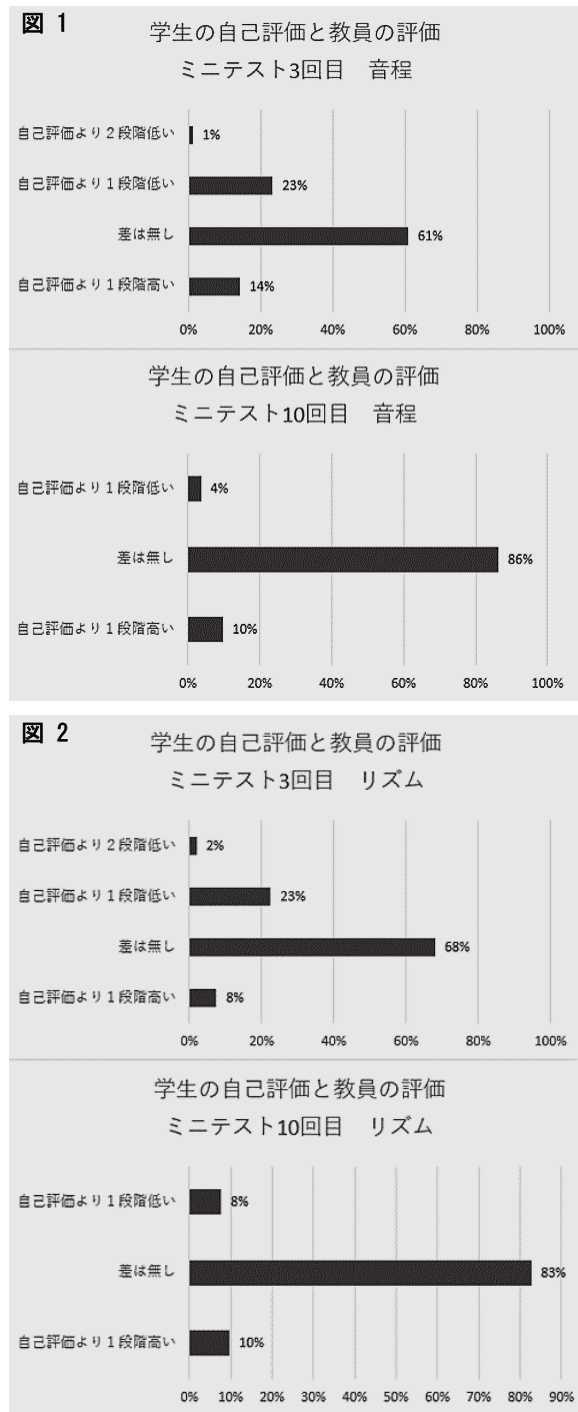
表 4 は「音楽 I 歌唱」の授業計画を示している。この授業は、90 分間の授業を前半と後半に二分割しているのが特徴である。授業の進め方として、授業前半は、音楽理論や歌唱教材の取り組みなどを、授業担当者が一人で行う。後半は、16~20 名程を 3 グループ (受講者数によっては 4 グループ) に分割し、各教員がそれぞれ個人指導を行う。つまり本科目は、全体指導と個人指導の 2 系統で授業を展開している。個人指導は、主に視唱テストによる指導で、予め設定した課題について一人ずつ合否判定を行う。本研究では、テスト 3 回目 (授業 5 回目) と、テスト 10 回目 (授業 12 回目) にループリック評価を実施し、学生の自己評価と教員の評価について比較した。また、ループリックの導入によって、学生がどのように認識したかを調査するため、テスト 10 回目にはアンケート調査も行った。

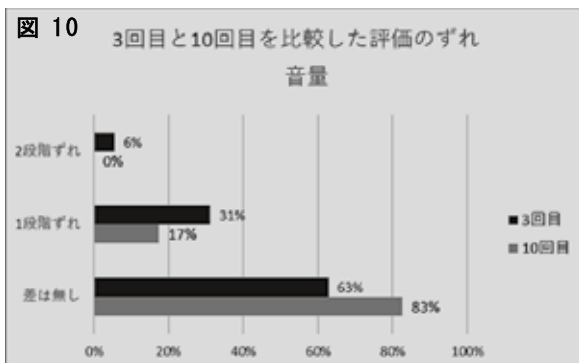
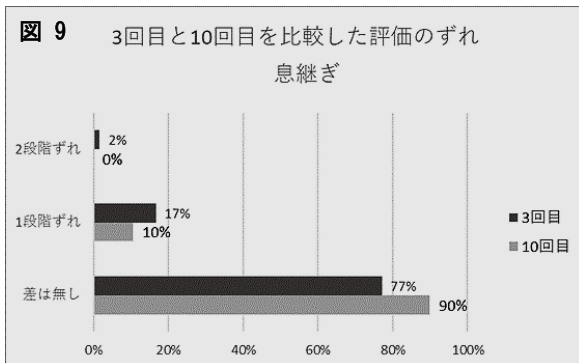
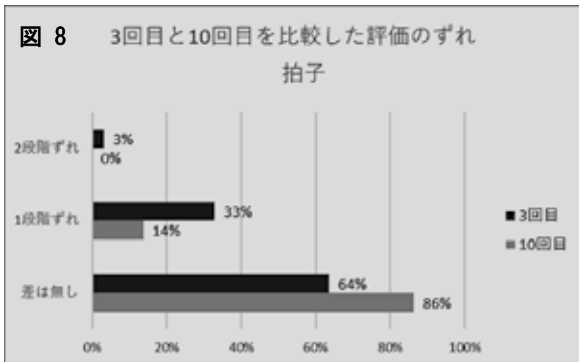
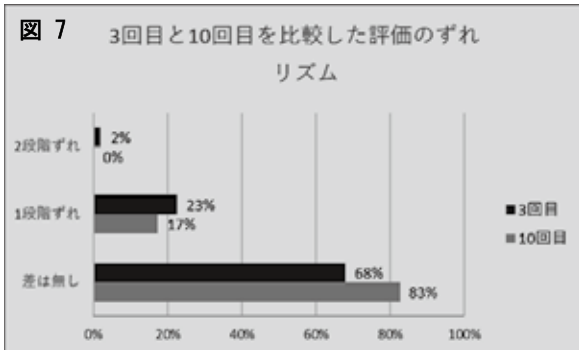
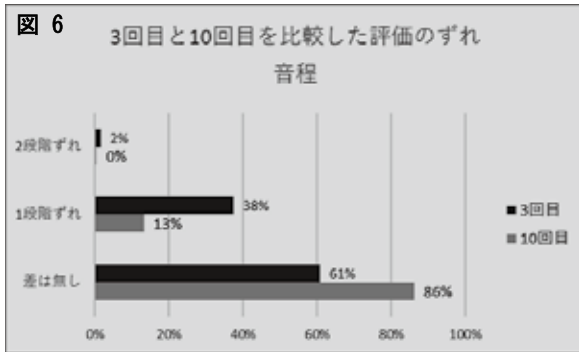
### 4 調査と結果

(1) 学生の自己評価と教員の評価について

調査対象：「音楽Ⅰ歌唱」履修者 250 名  
 (2018 年度 1 年次後学期)  
 調査方法：評価ルーブリック表を用い、課題  
 に対する学生の自己評価と教員の  
 評価を項目ごとに比較した。  
 調査時期：ミニテスト 3 回目 (授業 5 回目)  
 ミニテスト 10 回目 (授業 12 回目)

結果について、図 1～図 10 を示す。





結果

図 1～5 のように、3 回目の評価では、学生の自己評価と教員の評価に多少のずれがあった。しかし、10 回目の評価では、全ての評価項目において、3 回目よりも評価のずれが少なくなっている。

また図 6～10 は、学生と教員の評価のずれ幅について、3 回目と 10 回目を比較している。S, A, B, C, D の評価の中で、学生の自己評価と教員の評価が一致していれば「差は無し」、1 段階のずれがあれば「1 段階ずれ」、2 段階のずれがあれば「2 段階ずれ」とした。

分析の結果、全ての評価観点（音程、リズム、拍子、息継ぎ、音量）で 2 段階のずれが無くなり、1 段階のずれも 5 割以上減るなど、評価の乖離が軽減していることがわかった。

(2) アンケート調査による学生の認識

調査対象：「音楽 I 歌唱」履修者 250 名  
(2018 年度 1 年次後学期)

調査方法：アンケート調査

調査時期：ミニテスト 10 回目(授業 12 回目)

結果について、図 11～12、表 5～6 を示す。

図 11

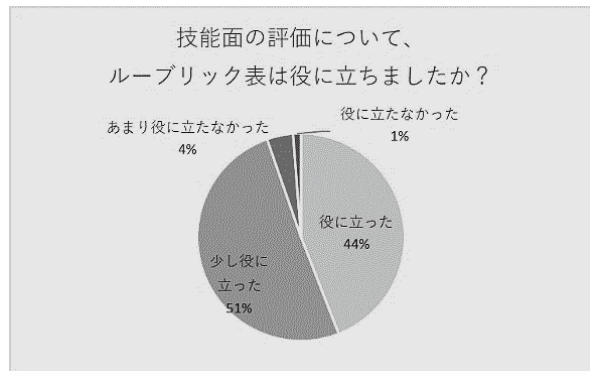


図 12

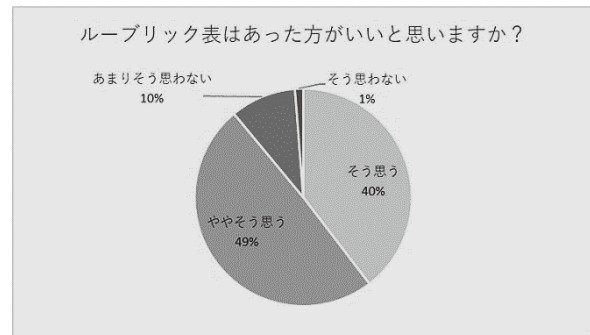


表 5

「技能面の評価について、評価ルーブリック表は役にたちましたか？」				
1.役に立った 2.少し役に立った 3.あまり役に立たなかった 4.役に立たなかった 理由：自由記述				
※アンケートの回答の一部を掲載				
①	2	3	4	聴唱より視唱が苦手だと気付けた
①	2	3	4	評価表をもとに、自分になにが必要か理解できた
①	2	3	4	高い音を出すのが苦手だったが、ルーブリック評価によって自信を持てるようになった。
①	2	3	4	どのような技術が必要か、また自分に足りないものはないかを知れた
①	2	3	4	自己評価と先生からの評価の違う点に気づけた
①	2	3	4	自分がの技能面を把握することができた
1	②	3	4	息継ぎができていないと気付けた
1	②	3	4	気を付けて練習に取り組める
①	2	3	4	どういうことを中心に練習した方がいいかわかった
1	②	3	4	自分がどのような状態にあるか見直すことができた
①	2	3	4	自分自身の状態を把握し、どのようにすればよいかを考えることができた
1	②	3	4	自分がどのくらいできているか振り返ることができる
1	②	3	4	自分ができていないことが何かわかった
1	②	3	4	先生が考える評価を知りたい
①	2	3	4	自分に不足していることを知ることができた
①	2	3	4	自己評価後の先生の評価で自分の足りていないところ・出来ていないところが分かった
①	2	3	4	評価方法が理解できた
1	②	3	4	自分と先生の評価に少し違いがあった
①	2	3	4	どのようなところを頑張ればいいのか分かった
①	2	3	4	目に見える評価は分かりやすい
①	2	3	4	評価を見て頑張ろうと思った
①	2	3	4	自分のできていないところを確認できた
1	②	3	4	先生の評価基準が参考になった
①	2	3	4	自分のできないところや努力不足のところを再確認することができた
1	②	3	4	出来ないところがよか分かった
1	②	3	4	しなければいけないところがわかった
①	2	3	4	自分のできていないところを確認でき、練習に活かすことができた
①	2	3	4	途中結果がわかる
①	2	3	4	自分のできていないところを確認できた
1	②	3	4	振り返ることができた
①	2	3	4	自分がどのくらいの位置にいるかわかった
①	2	3	4	出来ているところと、そうでないところを知ることができた
①	2	3	4	自分の力を見直すことができる
1	②	3	4	無いよりあるほうが目安になる
1	2	③	4	効果がない
①	2	3	4	自分の能力を把握できた
1	②	3	4	自分のできていないところを確認できた
①	2	3	4	自分のできていないところを確認できた
1	2	③	4	ある程度自覚している
1	②	3	4	自分の認識と実際の成果のずれを確認できる
①	2	3	4	どれくらい自分ができているかわかる
①	2	3	4	先生の評価をもとに、苦手なところを重点的に練習できた
1	②	3	4	自分を客観的に見れる
1	②	3	4	どこを注意して歌うと良いかわかりやすい
1	②	3	4	自分の出来ていないところがわかる
①	2	3	4	先生がどんなふうにみせてくれているかわかって、どこを直そうか考えることができた
①	2	3	4	自分と先生の評価が近いと嬉しい
1	②	3	4	自己評価と先生の評価を照らし合わせることができるようから
①	2	3	4	自分がどのくらいの位置にいるかわかった
①	2	3	4	自分がどのくらいの位置にいるかわかった
①	2	3	4	次に活かすことができる
①	2	3	4	自分で目標を持って取り組めた
①	2	3	4	自分の歌を振り返ることができる
①	2	3	4	自分の現状を知ることができた
1	②	3	4	次の課題に向けて気持ちの持ちようが変わった
1	②	3	4	自分がどのレベルかわかりやすかった
1	②	3	4	意識できる
1	②	3	4	正しい歌い方を意識して歌うようになった
①	2	3	4	評価表の内容を意識しながら練習することができた

表 6

「前学期と後学期の取り組みを比較して、評価ループリック表があった方がいいと思いますか？」

1.そう思う 2.ややそう思う 3.あまりそう思わない 4.そう思わない 理由：自由記述

※アンケートの回答の一部を掲載

1	2	③	4	先生によって評価基準が違う気がする。自分と同じくらい歌える子と評価が違っていた。
1	②	3	4	何を練習したらいいかわかりやすい
①	2	3	4	どこが苦手なのかはっきりわかったうえで練習できるから
1	②	3	4	比較しやすいと思うけど、歌の課題によって難しさが異なるため、難しいとは思う
①	2	3	4	自分が練習するときに何を頑張ればいいかわかる
①	2	3	4	自分が何が得意で何が苦手かわかるから
1	②	3	4	注意する箇所がわかる
1	②	3	4	良くなった点や、苦手な点等がわかる
①	2	3	4	自分に目標を持ち頑張りたい
①	2	3	4	自分と先生との評価が違うとき、その点を改善できる
①	2	3	4	自分の状況や成果について見直す機会を得ることができる
1	②	3	4	意識すべきことができて意欲的に取り組める
1	②	3	4	前期よりも自分について振り返れた
1	2	③	4	自分が評価すると少し否定的になると思う
①	2	3	4	自分自身を振り返ることで向上に繋がる
①	2	3	4	自己評価御の先生の評価で、自分の足りていないところ、出来ていないところが分かった
①	2	3	4	目標が明確になった
1	②	3	4	練習しやすくなった
1	②	3	4	いいと思う
①	2	3	4	先生から口頭で言われる注意のほかに、全体的な弱点
①	2	3	4	変化が分かる
①	2	3	4	自分の苦手を改めて知ることが出来る
1	②	3	4	何を気を付ければよいか明確になる
1	②	3	4	自分の練習を振り返ることができた
①	2	3	4	自分ができていないところがわかる
1	②	3	4	成績が少し良かった
①	2	3	4	課題に取り組みややすい
1	②	3	4	振り返ることができた
①	2	3	4	何を努力すればいいか分かった
①	2	3	4	BをAになるためにどうすればいいか考えることができる
1	2	③	4	一人の先生が評価をするなら平等だと思うが、複数の先生がそれぞれついているので、評価表はあってもいいが、評価の基準を平等にしたほうがいい
1	②	3	4	無いよりあるほうが目安になる
1	②	3	4	刺激が必要
1	②	3	4	自分の出来ていないところがわかる
1	②	3	4	自分の足りないところを目でみて確認できる
①	2	3	4	また頑張ろうと思える
1	2	③	4	評価にとられる人がいると思う
1	②	3	4	自分が成長したかどうかがわかる
①	2	3	4	成長が目に見える。できたつもりで終わらないようになる
①	2	3	4	苦手な部分があった状態から練習すると、より効果的に質の高い練習方法が身につく
①	2	3	4	わかりやすい
1	②	3	4	自分の出来ていないところがわかる
1	②	3	4	前期より後期のほうが意欲的に取り組めた
1	②	3	4	先生がどんなふうに見てくれているか分かって、どこを直そうか考えることができた
1	②	3	4	自分をもっとどうすべきかわかりやすい
1	2	③	4	先生が変わると評価も変わると思う
①	2	3	4	もっと頑張ろうと思える
①	2	3	4	どこが良くなり、どこが悪くなったか分かりやすい
1	②	3	4	あった方がいいと思うが、自分で理解できる人も多いので、どちらでもよいと思った
1	②	3	4	自分の成果（成長）を比較したい
①	2	3	4	振り返りは大事だと思う
①	2	3	4	自己評価と先生の評価を比較できる
1	②	3	4	次の課題に向けて気持ちの持ちようが変わった
1	②	3	4	自分の出来ていないところがわかる
1	2	3	④	一人の先生が評価でかたまってしまふ
①	2	3	4	確認できる
1	②	3	4	記録に残るし、他者の評価をみることができる

## 結果

「ループリック表は役に立ちましたか？」の問いに対し、「役に立った」「少し役に立った」を合わせると、90%以上の学生が肯定的な回答をした。その理由として、表5のように、「自分のレベルが分かった。先生との評価の違いが認識できた。次にどの部分を練習すればいいか具体的にわかった。」等と回答している。

一方、7%の「学生があまり役に立たなかった」と回答しているが、その理由として、「複数の先生で担当しているため、先生によって評価の基準に違いがあると思う」などと回答していた。

また「評価ループリック表があった方がいいと思いますか？」の問いに対して、「そう思う・ややそう思う」を合わせると、80%以上の学生が肯定的な回答をした。一方、18%が「あまりそう思わない」2%が「そう思わない」と回答しているが、その理由として、「見直す機会があまりない」「ループリック表がなくても自分で練習できる」等と回答していた。

## 5 考察

(1)ループリック評価を活用し、「音楽Ⅰ歌唱」の到達目標や評価基準を共通理解したり、教員や学生同士でのカンファレンスを行ったりすることで、自分の課題解決に見通しをもたせ、学修に対する意欲を向上させること。

図1~5は、教員と学生の評価を比較したものである。学生の自己評価と教員の評価には、3回目の評価でみられたばらつきが、10回目の評価では少なくなっていた。学生がコーンユーブンゲンの歌唱において、特に課題意識を持つ「音程」「リズム」「拍子」「息継ぎ」「音量」についても、図1~5に表れているように、教員と学生の評価のばらつきが少なくなっている。

また図6~10のように、3回目の評価では、学生の自己評価と教員の評価に1段階のずれが生じたものが38%、2段階のずれが生じたものが2%であった。これに対し、10回目の評価では、1段階のずれが9%と少なくなり、2段階のずれが0%となった。これは、学生が教員と同じ評価尺度で自己分析できるようになった結果であり、批評的思考力の向上につながったといえる。

今回、「音楽Ⅰ歌唱」の第1回目にループリ

ック評価表を配布し、「本科目全体にかかる目標」と「歌唱の技能面にかかる目標」を、教員が学生に対して説明するとともに、評価基準を共有した。これにより、学生が授業の中で、どこまでできるようになればよいのか、さらに、そのためにどのような歌唱の技能を修得すればよいのかを、具体的にイメージし、学修に対して積極的に取り組むことができた。

学生は、毎回の授業の中で教員からアドバイスを受け、ループリック評価においても教員からコメントをもらっている。それにより、「自分は音程を取るのが課題だ」等、自身の歌唱表現における課題点の把握につながっていると考察する。また、教員は解決の方途が見出せない学生に対して、「ピアノを弾きながら音を取って歌ってみよう」「リズムを一緒に打って、リズム唱をして旋律をつかもう」等の、具体的な練習方法をカンファレンス時に提案することができた。

このようなループリック評価とカンファレンスを活用した授業の取り組みに対して、図12のように「評価ループリック表があった方がいいと思いますか」の問いに対し、90%の学生が「そう思う・ややそう思う」と肯定的な回答をしている。その理由として、「4 調査と結果」にも示したように、表4の中に「評価表をもとに、自分に何が必要か理解できた」「自分自身の状態を把握し、どのようにすればよいかを考えることができた」「息継ぎができていないと気付けた」等があがっている。図6~10のグラフからも、学生と教員のばらつきが少なくなっていることから、学生の意欲面の向上がうかがえ、ループリック評価の活用が学生の主体的な学びにつながったと捉える。

(2)学生のループリック評価を通して、教員の授業改善の方途を明らかにすること。

学生の評価と教員の評価が一致しない場合、学生が教員の評価に納得できず不安を感じる場面も見られる。

表5の学生の声の中に「教員の評価の基準に違いがあると思う」という意見があった。その学生とのカンファレンスでは、「別の教員から指導を受けている友人と練習をしていると、自分が明らかに友人より歌えていないと感じていた。しかし、教員の評価は、自分の方が高かったため、これでよいのか不安である。」という旨の話をした。担当教員は、学生に目標と評価基準について説明し、十分A基準を満た



していることを伝えたことで学生は納得した。カンファレンスは、互いの評価を出し合うだけでなく、学生間、学生と教員間で評価基準について細やかに話し合うことで、評価基準をより確かなものにできる。今後、教員間で授業の目標と評価基準を十分に理解する場面をもつことが必要になってくる。

## 6 成果と今後の課題

### (1) 成果

「本科目全体にかかる目標」と「歌唱の技能面にかかる目標」の2種類のループリック評価を実施した。これらのループリック評価を通して「音楽Ⅰ歌唱」の科目に対する学修意欲に向上が見られた。さらに歌唱の指導に関する技能に関しては、ループリックを活用して一人ひとりの学生に応じた細やかな指導ができた。学生にとって教員や友人とのカンファレンスは、課題の解決に向けた良い機会となり、具体的な練習方法を知ること、歌唱技能の向上につながったといえる。

したがって、「本科目全体にかかる目標」と「歌唱の技能面にかかる目標」の2種類のループリック評価を実施したことで、学習意欲・態度の向上と歌唱技能の向上につながったといえる。

学生一人ひとりが抱える課題や不安は異なる。ループリック評価を行うことで、学生の評価と教員の評価が異なった場合、どこに原因があるのかを、カンファレンスを通して的確な指導助言を行うことができ、一人ひとりの学生のニーズに応えることができたと考えられる。

以上のことから、ループリック評価を用いて目標と評価基準を学生と教員で共有し、また、教員と学生の対話の機会を設けカンファレンスを実施することは、学生の学修成果の可視化を図り、さらに学生の能動的・主体的な学修を促すことがわかった。

### (2) 今後の課題

今回は、質問をしてきた学生とのみカンフ

ァレンスを行った。質問はしていないが、不安を感じている学生がいた場合の対応方法を工夫したい。

「音楽Ⅰ歌唱」の授業は、歌唱技能に関する指導(45分)を複数の教員で行っている。教員間のループリック評価に関する評価基準及び評価規準のとらえ方の共通理解が基盤となるため、指導に関しての共通認識や、学生との個々のカンファレンス事案についての共通理解を充実させることが求められる。

今後、大学でもカリキュラム編成が進み、音楽の技能に関する授業時間が精選されることが予測される。その際に、ループリック評価を活用することが学生の学習意欲・態度の向上に役立つと考える。

コロナ禍において対面での授業が確保できずWEBで技能実技の授業を進めざるを得ない昨今の状況の中で、このループリック評価がいかに学生の不安の解消や、授業に対する意欲・態度の変化に影響するのかを今後検証したいと考える。

### 引用文献

- 1)ダネル・スティーブンス他『大学教員のためのループリック評価入門』玉川大学出版部(2014)
- 2)教育振興基本計画 閣議決定(平成30年6月15日)
- 3)坂本健成「ループリック評価の実践に向けたレクチャー&ワーク」中村学園大学教育ワークショップ資料(2018)

### 参考文献

- 1)文部科学省「小学校学習指導要領解説音楽編」開隆堂出版(2008)
- 2)文部科学省「幼稚園教育要領」(平成29年告示)厚生労働省「保育所保育指針」(平成29年告示)内閣府 文部科学省 厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」(平成29年告示)
- 3)松下佳代「ディープ・アクティブラーニング」勁草書房(2015)